

# 知的障害特別支援学校におけるカリキュラム・マネジメント — 高等部家庭科の授業づくりに焦点をあてて —

八幡(谷口)彩子\*<sup>1</sup>・田口朱美\*<sup>2</sup>・奥田隼人\*<sup>3</sup>・上園宗徳\*<sup>3</sup>・倉田沙耶香\*<sup>3</sup>

Curriculum management in special support school for children  
with intellectual disability  
—Focusing on higher home economics education classes—

Ayako YAHATA-TANIGUCHI, Akemi TAGUCHI, Hayato OKUDA,  
Munenori UEZONO and Sayaka KURATA

## 1. はじめに

2017年に告示された新学習指導要領では、「社会に開かれた教育課程」の実現を基本理念に、「主体的・対話的で深い学び」の視点から授業を改善し、カリキュラム・マネジメントを確立させることが求められている<sup>1) 2)</sup>。

熊本大学教育学部附属特別支援学校では、2017年4月から3年間、文部科学省「特別支援教育に関する実践研究充実事業（新学習指導要領に向けた実践研究）」の事業委託を受け、「新学習指導要領を見据えたカリキュラム・マネジメント～熊大式マネジメントシステムの構築～」をテーマに研究に取り組んだ。

本稿では、同校高等部において、2019年度に取り組んだ家庭科におけるカリキュラム・マネジメントと授業実践の成果と課題について報告する。

### 1) 教科選定の理由

熊本大学教育学部附属特別支援学校高等部（以下、「高等部」）では、卒業後の3年、6年、10年後の「働く」「家庭」「余暇」の3つの側面について面談を実施し、卒業生のフォローアップを行う「フォローアップミーティング」に取り組んでいる。この際、卒業後の「働く生活」に関しては、卒業後の年数を経るにつれて伸びがみられるが、「家事」などの「家庭生活（ライフスキル）」の項目や「外出」や「趣味（室内）」などの「余暇生活」の項目が他の項目に比べて実践につながっておらず、課題を抱えていることがわかった<sup>3)</sup>。これを受けて、2017年度は

体育、音楽、家庭の3つの教科を研究対象に選定し、研究を行ったが、研究を進める中で、高等部段階においては、家庭科の学習をさらに充実させることが、卒業後の「外出」や「家事」の課題改善につながると考え、2018年度<sup>4)</sup>・2019年度は、家庭科に焦点を当てて研究に取り組むこととした。

## 2) 研究の課題及び研究方法

### (1) 研究の課題

①2018年度、「何ができるようになるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」「いつ学ぶのか」の4つの視点から、高等部家庭科の3年間の年間指導計画（表1）を作成した。また、実際の授業づくりにおいては、Mシート（単元・題材レベルの学習指導計画と・評価計画を記述するシート）・Sシート（1時間単位の授業計画を記述するシート）を活用し、授業づくりに取り組んできた。その中で、新たに年間単元配列表（表2）（以下、「Lシート」）を作成・活用していくことで、単元・題材における評価を年間及び教育課程レベルまで確実につなげていくPDCAサイクル（図1）ができると考えた。

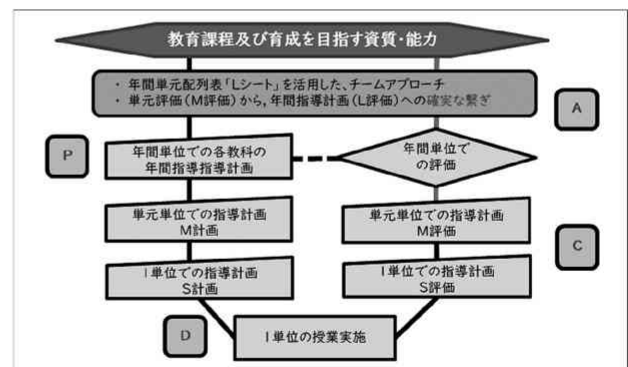


図1 授業づくりのPDCA

\*<sup>1</sup> 熊本大学大学院教育学研究科

\*<sup>2</sup> 熊本県立大津支援学校

\*<sup>3</sup> 熊本大学教育学部附属特別支援学校

②これまで家庭科の題材については、各学年の生徒の実態や課題に合わせて設定してきた。2018年度作成した家庭科の年間指導計画（表1）については、知的障害のある生徒の実態に合わせて、どのような授業づくりが有効なのかに関する検証ができていない。そこで、授業の構成や流れ、主体的活動の工夫など、生徒の学びにつながるための授業づくりのポイントや有効な手立てを授業者だけでなく、高等部の職員全員で共有し、整理していくことが、よりよい授業実践につながるのではないかと考えた。

表1. 家庭科の年間指導計画（3学年）

高等部「家庭科」年間指導計画（3年間） 令和元年度：新学習指導要領改定版R1.11月			
内容 学年	A「家族・家庭生活」	B「衣食住の生活」	C「消費生活・環境」
	1年	2年	3年
目標 テーマ	家庭生活についての基本的な理解と、衣食住に関する基礎「習得」	家庭生活に必要な衣・食・住に関する知識、技能の深まり「活用」	家庭生活に必要な衣食住に関する実践力（卒業後）「探究」
月日	学習内容		
4/19	【Aア自分の成長と家族】 ・自分の役割Ⅰ（役割と仕事）	【Aア自分の成長と家族】 ・自分の役割Ⅱ（立場と役割）	【Aア自分の成長と家族】 ・自分、家族の役割Ⅲ （それぞれの役割）
4/26	【B才住居の基本的な機能と快適で安全な住まい方】 ・住居：掃帚と整理整頓Ⅰ	【B才住居の基本的な機能と快適で安全な住まい方】 ・住居：部屋の荷物整理	【Aイ家庭生活での役割と地域との関わり】 ・家族団らん ・結婚
5/28	【Bウ衣服の選択】 ・洗濯：洗濯（洗分） ・洗濯：洗濯（すすぎ・脱水）	【Bイ日常食の調理】 ・食物：消費・賞味期限 【Bア食事の役割】 ・食物：必要な栄養を満たす食事 ・食物：栄養バランス（1日分）	【Bイ日常食の調理】 ・食物：食器・洗剤（しつこい汚れ） 【Bウ衣服の選択】 ・クリーニング、コインランドリー
6/28	【Bウ衣服の選択】 ・洗濯：TPO	【Bイ日常食の調理】 ・食物：調理Ⅱ 弁当計画	【Bウ衣服の選択】 ・クリーニング、コインランドリー
7/5	【Bウ衣服の選択】 ・洗濯：TPO	【Bイ日常食の調理】 ・食物：調理Ⅱ 弁当計画	【Bウ衣服の選択】 ・クリーニング、コインランドリー
9/13	【Aイ乳幼児や高齢者などの生活】 ・乳幼児との関わり方	【Bイ日常食の調理】 ・食物：調理Ⅱ 弁当計画	※現場実習
10/2	【Aイ乳幼児や高齢者などの生活】 ・高齢者との関わり	【B才住居の基本的な機能と快適で安全な住まい方】 ・住居：整理整頓Ⅱ 衣替え	【Cア消費生活】 ・計画的な消費（銀行）・収支
10/25	【Bア食事の役割】 ・食物：栄養バランス（一食分）	【Cア消費生活】 ・収支Ⅰ（収支バランス、ICカード、現金）	【Cイ消費者の基本的な権利と責任】 ・悪徳商法・契約
11/21	【Bイ日常食の調理】 ・食物：調理Ⅰ （食分に脂・塩・糖・油・酢・温め）	【Cア消費生活】 ・予算内の買い物（レシート、小遣い帳）	【Bイ必要な栄養を満たす食事】 【Bイ日常食の調理】 ・食物：栄養バランスⅢ
12/20	【Cア消費生活】 ・ものとお金の価値	【Cア消費生活】 ・予算内の買い物（レシート、小遣い帳）	【Bイ必要な栄養を満たす食事】 【Bイ日常食の調理】 ・食物：消費・賞味期限Ⅱ ・エアコン、電気
1/24	【B才住居の基本的な機能と快適で安全な住まい方】 ・住居：ゴミの分別と処理	【Aイ家庭生活における健康維持と余暇】 ・休日の使い（余暇）	【B才住居の基本的な機能と快適で安全な住まい方】 ・住居：防災・防犯
1/31	【Bウ衣服の手入れ】 ・洗濯：アイロン	【Bウ衣服の手入れ】 ・洗濯：アイロンⅡ（立体）	【B才住居の基本的な機能と快適で安全な住まい方】 ・住居：快適な暮らし
2/7	【Bエ布を用いた製作】 ・縫製：縫製（針・糸・ボタン）	【Bウ衣服の手入れ】 ・洗濯：アイロンⅡ（立体）	【B才住居の基本的な機能と快適で安全な住まい方】 ・住居：快適な暮らし
2/15	【Bエ布を用いた製作】 ・縫製：縫製（針・糸・ボタン）	【Bウ衣服の手入れ】 ・洗濯：アイロンⅡ（立体）	【B才住居の基本的な機能と快適で安全な住まい方】 ・住居：快適な暮らし
2/28	【Aイ家庭生活での役割と地域との関わり】 ・家庭の役割Ⅰ（家庭での仕事）	【Aア自分の成長と家族】 ・自分、家族の役割Ⅱ（立場と役割）	【Aア自分の成長と家族】 ・自分、家族の役割Ⅲ（それぞれの役割）

表1の年間指導計画について、高等部では、高等部全体で生徒の実態に合わせた学習グループを編成する「学部縦割り」の授業を行うことが多いが、家庭科は学年単位で授業を行っているため、各学年の2019年度の年間指導計画を示している。旧学習指導要領に準拠した2018年度の年間指導計画をもとに、2019年2月に告示された「特別支援学校高等部学習指導要領」に準拠するものに全面的に改善を図った。

(2) 研究方法

①L・M・Sシートならびに高等部の教育課程全体を見渡せる年間単元配列表を活用したカリキュラム・マネジメント  
学校行事や他教科等と家庭科の学習を有機的に関

連付け、より効率的な学習を実現させるために、高等部の教育課程全体を見渡すことができる年間単元配列表（Lシート）を作成する。1年間の教育課程や単元配列を見直し、学期末などの定期的な時期を設定して、家庭科の単元・題材の配置時期や内容、順序性、他教科等との関連のあり方は適切であったかなどを振り返り、必要があれば、家庭科の年間指導計画を含めた高等部の教育課程全体（カリキュラム）の改善を図る。このような方法を通して、適切なカリキュラム・マネジメントが構築できたかを検証する。カリキュラム改善を通して、定期的なスパンで単元・題材の学習評価及び授業評価を行うことで、各教科等との関連・指導時期・指導内容、配列、年間指導計画を見直し、より効率的に授業の質を向上させるプロセスを明確化する。

②主体的・対話的で深い学びを実現する家庭科の授業づくり

家庭科の年間指導計画をもとに、各学年の生徒及び学習集団の学びに合わせ、主体的・対話的で深い学びを実現する授業づくりについて、I「授業の構成と流れ」、II「主体的活動の工夫」、III「家庭との連携」の3つの視点で授業実践に取り組む。

2. 年間単元配列表（Lシート）を活用したカリキュラム・マネジメント

2018年度までの取組では、M・Sシートを活用し、学年担任の職員が協働しながら授業づくりと評価を行うチームアプローチによる単元・題材レベル（M・S）の授業計画の立案及び授業評価・改善に取り組んだ。2019年度は、年間指導計画レベル（L）での評価及び振り返りのプロセスを明確にして、M・Sの評価を活用した実践に取り組んだ。（図2）

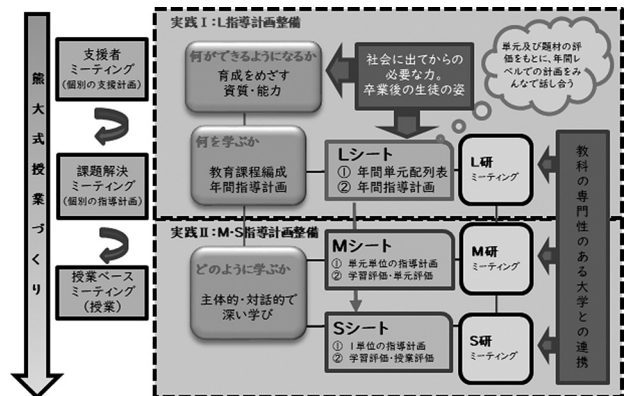


図2 L・M・Sシートを活用した授業づくり

1) 年間単元配列表（Lシート）のPDCAサイクル  
2019年度、高等部では、以下の手順でカリキュラ

ム・マネジメントを進めた。

- ① 2019年3月、翌年度1年間の教科等の単元を配列した年間単元配列表を作成した。各教科等の関連・指導時期・指導内容、配列等の視点から年間指導計画を高等部全職員で検討した。
- ② 2019年8月・12月・2月の3回、各教科等のM・Sシートの評価の際に出てきた指導内容・時数・時期や教科間の関連などのさらに効果的な授業づくりを進めるための課題を持ち寄り、年間単元配列表(Lシート)下部の評価欄に気づきを書き込みながら、高等部の全職員で教育課程の改善に取り組んだ。
- ③ Lシートの評価の際に、「高等部の目指す資質・能力」の観点から、各教科等の指導において身についた資質・能力を確認した。どの教科でどのような「資質・能力」につながったのかを確認できたことで、各教科等の指導上のねらいを再認識した。
- ④ 12月のL研の評価をもとに、次年度の年間指導計画及び教育課程について検討を行った。その中で、より教育効果が高まるように他教科等と関連を図り、学習時期を変更したり、題材を組み替えたりしながら、教科間の学びが効果的につながるように再配置できた。

## 2) 年間単元配列表(Lシート)の構成(表2)

高等部の年間単元配列表は、以下の要素・手順で構成される。

- ①横軸(上部)には月及び学校行事を配置し、1年の時系列的視点で年間行事等が見渡せるようにした。
- ②縦軸(左側)には教科等を配置し、教科横断的な視点から検討ができるようにした。
- ③高等部の中核となる教科「生活単元学習」「職業」「家庭」を軸として上部に配列した。

表2. 年間単元配列表(Lシート)

令和2年度 高等部 年間単元配列表(Lシート)		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
学年	1	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
教科	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	
単元	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	
社会	全															
保健	全															
保健体育	全															
音楽	全															
外国語	全															
理科	全															
美術	全															
図画	全															
数学	全															
英語	全															
自立	全															
職業	全															
生活単元学習	全															
家庭	全															
評価																

- ④各教科等の学習内容(単元)を、付箋シートに記入し、Lシートの該当する学習時期に貼付した。
- ⑤表の下部に、L研における評価・気づき等を記述する。

## 3) Lシートの実践活用

- ①L研①「年間単元配列表」作成
  - 期日：2019年3月末
  - 材料：年間単元配列表(Lシート)(表2の状態)  
教育課程年間評価シート  
各教科等の年間指導計画面
  - 方法：各教科等の単元・題材名および学習内容を簡潔に付箋に書き、各教科等の担当者が1教科ずつ付箋を貼りながら学習のねらい等を説明する。その際、横軸の時系列の視点と縦軸の教科横断的な視点で見て、その教科等の学習の順序性や時期は適切か、他の教科等との関連を考えた時、学習の時期は適切かなどを検討していく。また、最後に全体を俯瞰的に見て、調整を行う。
- ②L研②「2019年度4月～7月の振り返り」
  - 期日：2019年7月末
  - 材料：Lシート(L研①で作成した年間単元配列表)  
各教科の年間指導計画の冊子  
各教科等のM・Sシート(評価)  
高等部の育成を目指す資質・能力
  - 方法：1教科ずつ、M・Sの評価をもとに、年間を通した時数や他教科との関連について視点をもって振り返り、年間単元配列表の下部の欄に記入する。また、各教科の学習で高められた「高等部の育成を目指す資質・能力」について考える。年間の指導計画及び単元配列を俯瞰的に見て、気づきを年間単元配列表の下部の欄に記入する(写真1)。



写真1 L研②の様子

③L研③「2019年度の9月～12月の振り返り」

期日：2019年12月末

材料：Lシート（L研②で作成した年間題材配列表）

各教科のM・Sシート（評価）

個別の指導計画評価

高等部の目指す資質・能力

各教科等関連表

方法：後期の個別の指導計画を、12月末の段階で担任が学習評価する。また、各教科等の関連表に基づいて、教科担当者が12月末段階での授業評価を行う。この2つの評価と、各授業のM・Sの評価を1教科ずつ学部教員全員で共有し、指導内容・時数・時期が適切であったかを検討する。また、その検討をもとに次年度の志向を年間単元配列表の右の評価欄に記入する（写真2）。

写真2 2020年度に向けたカリキュラムの志向（右端）  
・評価（下部）を記載した年間単元配列表（Lシート）

### 3. 授業実践

#### 高等部1年「衣服の手入れをしよう」

ここでは、高等部1年における家庭科の題材「衣服の手入れをしよう」の授業実践とカリキュラム・マネジメントの実際について報告する。

##### 1) 授業実践の目的

授業実践の目的は、以下の2点である。

- ①L・M・Sシートを活用して、高等部1年の生徒の実態に合う家庭科の授業づくりを効果的に進めること。
- ②題材「衣服の手入れをしよう」において、主体的・対話的で深い学びを実現する授業実践を行うこと。

##### 2) 生徒の実態

本校高等部では、家庭科の授業を、他の教科等で

実施している「学部縦割り」ではなく、学年（学級）単位で実施している。本実践を行った高等部第1学年は、男子5人、女子3人、計8人の学年（学級）である。高等部1年家庭科衣生活分野の学習は、すでに「洗濯」の学習をしており、実際に自分で洗濯に取り組むことから課題を見つけ、友達の見意見を参考にして適切な洗濯の方法を考えたり、動画で自分や友だちの洗濯の様子を振り返ったりしながら、よりよい洗濯の方法を見つけていくといった実践的・体験的な学習を進めてきた。

本授業は、『特別支援学校高等部学習指導要領（平成31年2月告示）』第2章第2節第1款〔家庭〕2段階の内容「Bウ衣服の手入れ」に関する実践である。高等部1年の生徒は、中学校段階までに、玉留め、玉結び、ボタン付けの手縫いの基礎について学習しているが、実生活で活用するには至っていない。また、生徒の中には、スカートやズボンの裾が落ちていることに気づかなかったり、ボタンが取れていても、見えないからそのままにしていたりする生徒、ボタンが取れたときにどうしていいかわからないという生徒もいる。

高等部1年では、「快適に安全に生活しよう」という家庭科衣生活分野のテーマを設定して学習を進めてきた。「洗濯」の学習では、衣服がきれいになると気持ちがいい、ということを実感している。これからの生活の中で「自分の身なりに関心を持つこと」「どのように修繕や手入れをすると気持ちよく生活できるのか」という学習課題は意義があるものであり、教育的ニーズもあると考える。

### 3) 取組の実際

#### (1) 授業構成の工夫

##### ①学習過程の見通しを持たせる授業の流れ

授業の構成は、前年度の本校高等部1年の家庭科の授業構成<sup>9)</sup>を参考にした。「つかむ・見通す・探る・深める・振り返る・まとめる」という授業の流れと、本時の課題をはじめに提示することで、授業の中で考えること、活動することが明らかになり、生徒は学習の見通しを持って授業に参加することができる。昨年までの授業実践において、授業の流れを一定にすることにより、生徒が主体的に活動し、自分から考えを述べる姿が見られている。

一方、活動に時間を割くあまり、振り返りや自己評価ができなかったという反省もあった。そこで、今回の取り組みでは、振り返りの時間を十分に確保し、「振り返る」活動に重点を置くことに意識して取り組んだ。

②年間指導計画をふまえたMシートの作成

前年度の年間指導計画をもとに授業を行った。前年度の高等部1年の生徒とは実態が異なるため、生徒の実態に即して、取り扱う題材の時間数を変更した。

以下、題材「衣服の手入れをしよう」のMシートの学習指導計画表を示す(表3)。

表3. 題材「衣服の手入れをしよう」のMシート(学習指導計画表)

学習計画(教育的ニーズ, 育成したい資質・能力等を踏まえて)	
期日	主な学習計画
1/31	<ul style="list-style-type: none"> <li>・衣服に関する自らの生活を振り返る。</li> <li>・モデルと比較することから課題をつかみ, 衣服の手入れの仕方を考える。</li> <li>・手入れの仕方を学習する。(①アイロンの使い方) まとめはkeynoteを活用。</li> </ul>
2/7	<ul style="list-style-type: none"> <li>・手入れの仕方を学習する。(②なみ縫い・ボタン付け・まつり縫い)</li> </ul> <p>※実態に合わせて行う。まとめはkeynoteを活用。</p>
2/12	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループに分かれ, 衣服の状態から手入れの仕方を考える。</li> <li>・手入れの方法を話し合い, 役割分担して手入れや修繕を行う。</li> <li>・各グループの手入れや修繕について振り返り, 共有する。</li> </ul> <p>※1/31のモデルに類似した制服を使って行う。まとめはkeynoteを活用。</p>
2/15	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループに分かれ, 衣服の状態から手入れの仕方を考える。</li> <li>・手入れの方法を話し合い, 役割分担して手入れや修繕を行う。</li> <li>・自らの手入れや修繕について振り返り, 共有する。また, 今後どのように生かしていくかまとめる。</li> </ul> <p>※1/31の題材(学校の制服)を使って行う。まとめはkeynoteを活用。</p>

本題材「衣服の手入れをしよう」は、「衣服の補修」と「アイロンのかけ方」について学習する題材として設定した。日常的に針と糸を使うという経験が少ない生徒が多かったため、前年度より2時間増やし、手縫いの基礎やアイロンのかけ方に関する技能の習得を目的とした時間を設けた。

このように、複数の学習内容を融合して題材構成することで、ストーリー性のある授業の流れの中で、針の使い方やアイロンのかけ方等、基本的な技能を習得できるようにした。

(2) 主体的活動の工夫

①問題解決型の学習方法

高等部1年の生徒は、日常生活の中で、着ている服の状態に無頓着である(ズボンやスカートの裾が落ちていたり、ボタンがとれていたりしても気づかない)といった実態があったため、「衣服の状態、何かおかしいところはないか?」と問題点に気づき、

「どうしたらきちんとした衣服になるのか?」「自分ならば、どのような修繕ができるのか?」という問題を解決するための手立て・方法を考える問題解決型の学習過程となるよう留意した。

①ボタンが取れている, 取れかかっている ②ジャケット, スカートの裾が落ちている ③ポケットにハンカチがしわしわの状態に入っている, ④ポロシャツのわきがはつれている, の4つのモデルを提示し, 思考ツールを使いながら, 衣服の状態で修繕が必要などところを見つけていった(写真3)。

その後、「衣服の修繕をどうしたらいいのか」を生徒同士で考えさせ, インターネットを使って調べさせた。さらに自分にできることはどんな修繕方法なのかということも併せて考えた(写真4)。



写真3 思考ツール

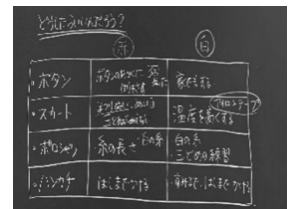


写真4 修繕方法

②一人一人の「できる」が見える, 手立て

生徒のほとんどが, 日常生活で手縫いをするのがなく, 手縫いの基礎が身につけていない。そこで, 手縫いの技能の習得を目的とした時間を設けた。

「ぞうきん縫い」を通して, 玉結び, 玉留め, 針の動かし方を学習した。真っ白なタオルでは, どこに針を刺せばいいのか, 針をどう進めていけばいいのかわからない生徒が多かったため, タオルの上に針を刺す場所がわかりやすいように目印をつけた。マジックで点々をつけることによって, 1針1針, 針の動きや運び方を確認しながら縫う様子が見られた(写真5, 6)。



写真5 点々をつけたタオル

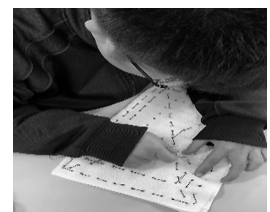


写真6 雑巾縫い

次の時間, 手入れを必要とするジャケットやポロシャツ, スカートの裾の縫う部分に印をつけたことで, 針を出す位置が明確になり, まっすぐ縫うことや針の出し入れの順番がわかるようになった(写真7, 8)。印をつけて何度か縫っていくうちに, 全く印をつけなくてもまつり縫いやボタン付けができるようになった生徒もいた。



写真7 スカートの裾



写真8 ジャケット

ポロシャツのわきの補修では、ポロシャツを縫っていくうちに縫い合わせる必要のない下の布まで一緒に縫い合わせてしまう生徒がみられた。自分で縫い合わせる布だけをうまく引っ張れないために、縫い合わせる必要のない布も縫い合わせてしまったものと考えられる。そこで、刺繍の時に使う刺繍枠をポロシャツに取り付けてみた(写真9)。そうすることによって、布がピンと張り、よれることなく針の動きだけに集中して縫うことができるようになった。



写真9 刺繍枠をポロシャツに取り付けて縫う様子

生徒の中には、ハンカチがしわになっていることがとても気になる生徒がいた。針を使えないわけではないが、生徒自身の「やってみたい」を大切にしたいと思い、アイロンがけを担当してもらうことにした。アイロンのかけ方はおおまかに理解しているが、隅々までかけることができていなかった。3人グループでアイロンを担当し、グループ内の他の生徒から、「ここまでかけて」「ハンカチを動かして」などのアドバイスを受けながら取り組んだ。友達からのアドバイスを聞き、かける前に手アイロンでしわを伸ばすことや「隅々まで」を理解でき、アイロンがけの技能が上達した(写真10)。



写真10 グループで見合いながらアイロンがけをする様子

### ③ ICT を活用した振り返り活動

昨年度の反省にもあったように、生徒自身の振り返りの時間を確保することに課題があった。今年度

は、動画を使って自分の学習する姿を客観的に見ながら、「工夫したこと(できたこと)・むずかしかったこと・これから頑張ること」の3点に絞って振り返りをした。従来はワークシート(紙)を使っていたが、書くことに苦手意識を持っている生徒や書くことに時間がかかる生徒がいたため、ワークシート(紙)ではなくICTを活用することにした。アプリはiPadの「Keynote」を使うことにした。Keynoteは、ワークシート画面の中に動画を簡単に貼り付けることができる。また、文字入力や文章表現が苦手な生徒は、マークや記号を用いて記入することができたり、キーワード入力で文字を選んで文を作成することができたりという利点がある(写真11)。

さらに、生徒の振り返りの際に戸惑いをなくすために、Keynoteのワークシートの形式は、毎時、揃えることにした。

はじめは、生徒のKeynoteのワークシート記入に時間がかかっていたものの、使い方が分かってくると自分の動画を見ながら、ワークシートの項目に沿って自己評価ができるようになった(写真12)。生徒の自己評価(振り返り)の内容を紹介すると、「はじめは点線がないとどこを縫えばいいかわからなかったが、次第に練習を重ねていく中で、縫う場所がわかり、まつり縫いが一人でできるようになった」などと、客観的に自分の学習を振り返ることができるようになった。また、「今日できるようになったことを家でもやってみよう」という思いを綴る生徒もいた。

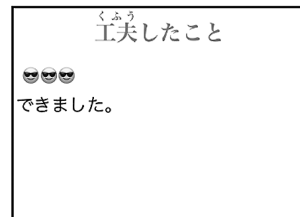


写真11 絵文字で気持ちを表したワークシート

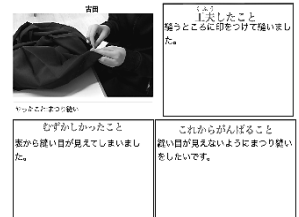


写真12 Keynoteで作成したワークシート

### (3) 家庭との連携

昨年度までは、授業の様子や学習した内容をポートフォリオとして綴じていく「家庭ブック」を家庭とのやり取りのツールとして活用していた。授業の様子もよくわかり、家庭とやり取りをするのに一定の評価があった。

今年度は、「家庭ブック」といった紙媒体のポートフォリオだけでなく、SNSを使って学校と家庭、相互のやり取りをした。授業の様子を動画で家庭配信することで、学校での授業の様子を家庭によりり

アルに伝えるとともに、学校での学びの様子や学習内容を家庭と共有することにより、家庭実践を促す環境づくりに家庭の協力も得られるのではないかと考えた。授業で扱った内容をすぐに家庭に伝えることができるので、休みの日に学校で学習したのと同じ内容を家庭実践で取り組み、その様子を動画として学校へ送っていただくこともしばしばだった。

動画配信に取り組む前は、生徒の家事に対する意識が低く、「お手伝いをする」といった程度だった。保護者も、「(生徒に任せると)時間がかかるから」や「自分のやり方があるから」等の理由で生徒に家事全般を任せることが少なかった。今回、授業で行った洗濯、調理やごみの分別の動画配信を行ったことで、授業内容や生徒の活動の様子を保護者にわかりやすく伝えることができた。洗濯物を畳んだり、食事の準備を生徒と家族と一緒にしたりと家庭での様子が増えたことが連絡帳の記述からもうかがわれた。また、アイロンがけの授業後に家庭でも実践していただき、アイロンの取り扱い方や段取りよくアイロンがけができるようになったことを保護者の方に認めていただいた。(写真13)。

しかし、動画だけの家庭とのやり取りは、手軽にできるよい面はあったが、1年の学習を振り返る時、動画だけでは詳しい授業内容の記録を残すことが難しく、1年間の授業の流れや学習したことをあらためてまとめる必要があった。家庭ブックと併せて動画配信を活用したり、学校での取り組みを振り返られるように、Keynoteにまとめたファイルを作成したりするなど、タブレットをより効果的に活用することができれば、今後、さらに充実した家庭との連携ができるのではないかと考える。

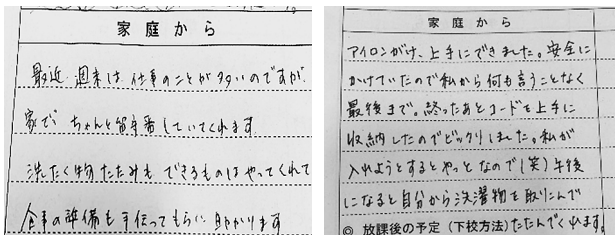


写真13 保護者からのコメント

(4) 授業づくりのためのL・M・Sシートの活用

まず、Mシートを使って授業の計画を立てた(図5)。一人一人の実態に合わせて技能が習得でき、お互い学びあいながら技能が習熟するように、習熟度の近いグループを作ること、興味を持って主体的に学習課題に取り組めるように、ストーリー性がある授業展開を組むこと、の2つに重点を置き、計画した。

つぎに、1時間毎の授業計画(Sシート)を作成し、授業を行い、反省を行った。(図3)

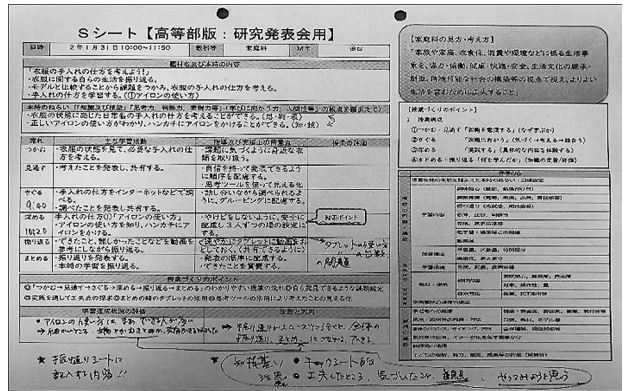


図3 1月31日のS授業研後のSシート

1月31日(第一次)の授業後のS授業研では、話し合いのグループと実際に修繕を行うグループでの活動に混乱があることや、個別の支援のあり方、振り返りの活動の仕方、タブレット上のワークシートの内容等の反省が上がった。それを元に授業改善を行うことで、生徒の修繕の技能も上達してきた。

2月12日(第三次)の授業では、場の設定の妥当性や振り返り活動の深め方など、より発展的な授業内容に関する反省が多くなった。(図4)タブレットをどのように使うか、ワークシートの項目はどうしたらいいのかなど、生徒自身の気づきを次の活動に生かせるような授業を行うための手立てを話し合った。

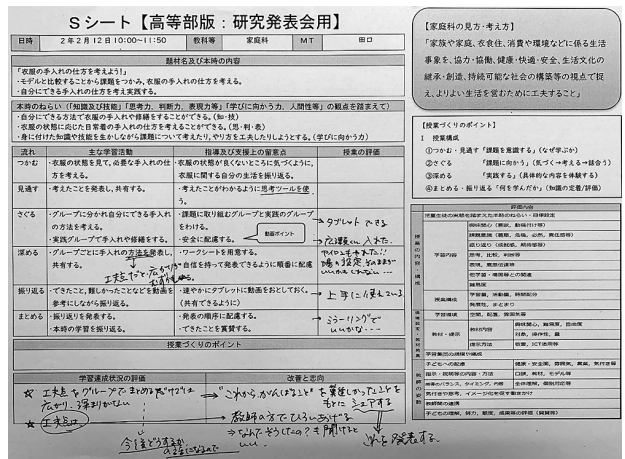


図4 2月12日のS授業研後のSシート

本題材「衣服の手入れの仕方を考えよう」の学習終了後、題材全体の反省を行った(M授業研)。一人一人の技能の伸びに感心すると共に、日常生活でもやってみたいという意欲も芽生え、ほとんどの生徒において、授業前に設定した目標を達成できていた。振り返り活動の時間を確保することで、自分の

活動をしっかり見つめ直し、次の学習に生かすことができたためと考える。また、振り返り活動におけるタブレット端末の活用も有効だった。

「アイロンのかけ方」と「衣服の修繕」の2つの学習内容を1つの題材として融合的に授業を実施したことで、年間指導計画の改善につながった。実態に応じて効果的に時間数を調整することにより、この題材の目標が達成できた。

Mシート【高等部：研究発表会用】

学部	高等部	学年・グループ	1年	領域・教科等名	家庭	
期間	1/31, 2/7, 2/12, 2/15			単位時間数	8	
単元名	「衣服の手入れをしよう」					
学習指導要領段階	家庭 2段階 B衣食住の生活 ウ衣服の手入れ					
学習概要 (既習と関連させた本単元のねらい)	衣服のしわになっている、ボタンが取れている等の状態に気づき、手入れを行うことを通して、「健康・快適・安全」の視点からより生活の実現に向けて工夫する力を養う。					
単元の目標						
知識及び技能	衣服の状態に応じた日常着の手入れの仕方がわかり、適切な手入れを行うことができる。					
思考力、判断力、表現力等	「健康・快適・安全」等の視点から衣服の状態に応じた適切な手入れの仕方を考えることができる。					
学びに向かう力、人間性等	身に付けた知識や技能を生かしながら課題について考えたり、やり方を工夫したりしようとする。					
学習計画（教育的ニーズ、育成したい資質・能力等を踏まえて）			ねらいと評価計画			
期日	主な学習計画			知・技	思・判・表	
1/31	・衣服に関する自らの生活を振り返る。 ・モデルと比較することから課題をつかみ、衣服の手入れの仕方を考える。 ・手入れの仕方を学習する。(①アイロンの使い方)まとははkeynoteを活用。			○	○	
2/7	・手入れの仕方を学習する。(②なみ縫い・ボタン付け・まわり縫い) ※実態に合わせて行う。まとははkeynoteを活用。			○		
2/12	・グループに分かれ、衣服の状態から手入れの仕方を考える。 ・手入れの方法を話し合い、役割分担して手入れや修繕を行う。 ・各グループの手入れや修繕について振り返り、共有する。 ※他の制服等を使って、まとははkeynoteを活用。			○	○	
2/15	・グループに分かれ、衣服の状態から手入れの仕方を考える。 ・手入れの方法を話し合い、役割分担して手入れや修繕を行う。 ・自らの手入れや修繕について振り返り共有する。また、今後どのように生かしていくかまとめる。 ※1/31の題材(学校の制服)を使って、まとははkeynoteを活用。			○	○	
留意事項・共通事項・準備物等						
・アイロン・アイロン台・ハンカチ9枚・針(穴の大きめのもの、先の尖っていないもの)・糸・布 ・制服(本校のもの・似たような制服)・タブレット(4~8)台						
個別の目標（評価基準 ◎：十分に達成できた ○：概ね達成できた △：〇に満たない）						
学年	児童生徒名	評価規準			評価	特記事項
1年	村下 壮太	知	衣服の状態(しわ、ボタン取れ、ほつれ)に応じたアイロンがけやボタンの縫い付け、裾上げの仕方を理解し、正しくできる。			
		思	見た目や着心地、安全面の視点から、衣服の問題点に気づき、衣服の状態に応じて、アイロンの温度、ボタンや糸の種類や縫い方を選択することができる。			
		主	身に付けた知識や技能を生かしながら考えたり、工夫したりしようとする。			
1年	安田 健	知	衣服の状態(しわ、ほつれ)に応じたアイロンがけや裾上げの仕方を理解し、正しくできる。			
		思	見た目や着心地、安全面の視点から、衣服の問題点に気づき、衣服の状態に応じて、アイロンの温度や裾上げの仕方を選択することができる。			
		主	身に付けた知識や技能を生かしながら考えたり、工夫したりしようとする。			
1年	夕村 義徳	知	なみ縫いやアイロンの仕方を理解し、正しくできる。			
		思	しわやボタン取れ、ほつれ等の衣服の問題点に気づき、問題点に合った道具を選択することができる。			
		主	身に付けた知識や技能を生かしながら考えたり、工夫したりしようとする。			
単元（題材）評価（〇：十分である △：検討が必要）						
期日	時数	内容	教材	学習グループ		

図5 Mシート

(高等部1年：家庭科「衣服の手入れの仕方を考えよう」)

#### 4) 成果と課題

##### 成果

①本題材において、手縫いの基礎やアイロンのかけ方、衣服の補修などの「衣服の手入れ」に必要な基礎的・基本的な知識と技能の習得、実際の生活場面によくみられる衣服の手入れや補修が必要な問題場面を設定し、問題点に気づき、必要な手立て・方法を考え、実践する、という問題解決的な学習過程による授業実践を行った。学習前には、衣服の手入れが必要な状態に気づかない生徒たちであったが、日常生活にリアルな問題設定場面を

設けたことにより、家庭科で育む見方・考え方を働かせて、身だしなみを整える方法を習得できたと考える。また、生徒の技能の習得状況をできるだけ正確に見取り、どのようなことに困っているのかを把握して支援を行うことにより、技能が高まる姿が見られた。

②前年度の課題であった「学習の振り返り」を効果的に行うために、iPadのkeynoteを用いて「振り返り」を行った。紙媒体のワークシートに記入するよりも、機器の文字入力の手助けを得て、効果的に自分の考えを表現する姿がみられた。このことから、ICTを用いた振り返りは本校の生徒には有効で、文字を書くことが苦手な生徒にとって、iPadの活用は、むしろ取り組みやすいツールであることがわかった。

##### 課題

①家庭科の同じ領域の学習を、複数の学年にわたって学習し、積み上げていく場合、次の学年において、どのように次のステップへとつないでいったらよいのか、という具体的な内容を次の学年の授業担当者に伝えにくいという課題がある。年度が替わり、担任が替わると、生徒の到達したところを明確に引き継ぐことができないので、動画やそれを使ったワークシートを整理し、次学年へと引き継ぐためのツールが望まれる。

②授業では、限られた時間でしか取り扱うことができないので、他教科（職業や体育など）を視野に入れ、教科横断的な活用場面を設定することと、家庭と連携しながら、日常生活における活用場面を増やしていくことで、般化の機会をより多く確保する必要がある。

③今回、題材として扱った「修繕」の学習では、「修繕」と「処分」の境目を明確に伝えることができなかった。知的障害のある生徒にとって、このような曖昧な境目を自分で判断することは難しい。衣服の実態をもとに、「修繕」するのか、「処分」するのか、という判断基準を、学習の中でどのように伝えるのか、引き続き検討したい。

#### 4. 成果と課題

##### 1) L・M・Sシートを活用したカリキュラム・マネジメント

2019年度は、L・M・Sの「評価」に重点を置き、カリキュラム・マネジメントのプロセスを考えてきた。2019年度の取り組みについて、高等部の職員7名を対象に、「カリキュラム・マネジメントに関するアンケート」を実施した(図6)。



Lシートを基に、単元・題材（M・S）レベルで定期的に授業の評価を行い、高等部の全職員が、成果や課題を共有できたことで、より効率的な教育課程改善につなげることができた。

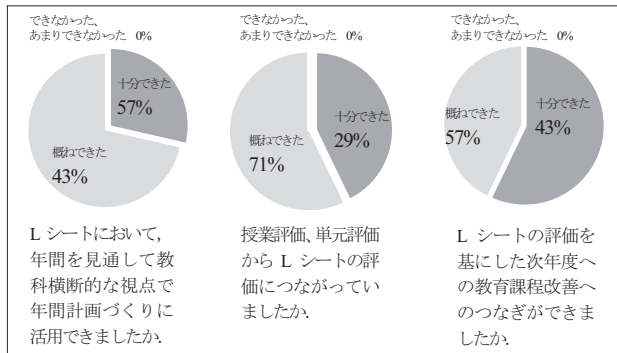


図6 カリキュラム・マネジメントに関するアンケート結果 (高等部職員 N=7)

また、Lシートを用いて、各教科等との関連・指導時期・指導内容、配列、年間指導計画を見直し、より効率的に授業の質を向上させることにつながったと考える。M・S評価を、L評価へ繋ぐプロセス(L研)に取り組むことにより、チームアプローチによる1単位時間の学習を大切にした授業改善・カリキュラム・マネジメントに取り組むことができた。

L・M・Sシートを活用したカリキュラム・マネジメントをする上で、高等部段階において育成を目指す「資質・能力」を明らかにし、核となる教科を据え、教科横断的な視点をもって様々な学習を組み立てて教育効果を上げることが重要である。M・S評価を基にLレベルの検討をしていくことが、カリキュラム・マネジメントにおいて重要な過程である。

また、各段階での評価(M・S評価)を効率的につないでいくためには、学部職員全員が一堂に会する時間と共有ツールが不可欠である。本校高等部で取り入れた付箋を用いたLシートは、L評価を行うにあたり、効果的なカリキュラム・マネジメントの要となったツールである。

習得した知識や技能が断片的になりやすく、生活の場で応用されにくい知的障害のある生徒に教科指導を行うにあたって、一つ一つの教科・授業を、1年という見通しを持ってより細やかにつなげていくことが今後も必要になる。そのためには、適宜L・M・Sの各レベルでの授業の評価・改善に取り組む、PDCAサイクルを効率的、かつ効果的にまわしていくことが重要である。

## 2) 主体的・対話的で深い学びに向けた授業づくり

2019年度は、家庭科の授業づくりに焦点をあてて、

研究を進めてきた。教科横断的な視点でL研を重ねた成果として、各教科等における主体的・対話的で深い学びに向けた授業づくりのポイントが分かってきた。知的障害のある生徒に対して、効果的に指導するために授業を組み立てる上で、本校高等部が大切にしてきたことを以下の表にまとめる。

表4. 知的障害教育における、授業づくりのポイント

流れ	授業づくりのポイント
つかむ	・明確な課題設定 ・学ぶ内容への意識付け、動機付けの工夫
見通す	・学習の流れの提示 ・学習の流れを統一
さぐる	・体験的に学ぶ活動の工夫 ・操作性のある教材の活用 ・グループで話し合い活動を設定 ・試行錯誤
深める	・学んだことを基に、さらに深めるための活動を設定 ・事象を対比 ・シンキングツールの活用
まとめる	・図、表、視覚的にも伝わるまとめ方 ・ICTの活用
振り返る	・ICTの活用 ・課題に対する学びをキーワードで確認

何を学ぶかを知り、その課題について試行錯誤し、体験的に学んでいくことが、知的障害特別支援学校における教科等の授業づくりのポイントと言える。

試行錯誤という点においては、トライ&エラーをしやすい媒体であるICTを活用することで、授業事例にもあった「やってみたい」という気持ちを育みやすいのではないかと考える。この「やってみたい」こそが、深い学びへの出発点である。

また、授業事例の「Keynote」の活用からも分かるように、理解力や手指の巧緻性等、障害の状態や認知の特性から生じる課題を補うという点においても、ICTの活用は有効で、学びを支える重要なツールであり、一人一人の学びをつなぎ、拡げる媒体として大きな可能性を感じている。

## 5. まとめ

以上、本稿では、新学習指導要領の趣旨を踏まえ、「熊大式マネジメントシステム」の構築をめざす熊本大学教育学部附属特別支援学校高等部の取り組みを述べた。

本校高等部が構築した「熊大式マネジメントシステム」は、教育課程や育成を目指す資質・能力を踏まえ、年間単元配列表(Lシート)、年間単位での各教科等の年間指導計画、単元(題材)単位での指導計画(Mシート)、1単位時間における指導計画(Sシート)による授業計画(Plan)→授業実施(Do)→1単位時間の授業評価(S評価)、単元(題材)

単位の単元（題材）評価（M評価）、年間単位の計画評価（L評価）をもとに、よりよい教育課程・カリキュラムの実現（Action）をめざすPDCAサイクルによるものである。計画・評価の各段階に用いるツール（L・M・Sシート）と高等部の全職員で、教科等の計画・評価を共有しあいながらよりよい教育課程・カリキュラムの実現につなげていこうとするチームアプローチの手法を提案した。

さらに、こうした「熊大式マネジメントシステム」が、教科等の具体的な授業改善等に有効に機能するのかを検証するために、高等部家庭科におけるカリキュラム・マネジメントの実際、授業計画と授業評価を踏まえた授業改善の実際、家庭科の授業における生徒の姿について報告を行った。障害の程度が重い生徒にとって、針と糸を使った衣服の補修に必要な技能の習得は決して容易ではない。本実践では、きちんとした衣服の着用とそのため必要な衣服の補修の技能の習得をめざし、スモールステップで授業計画を組み立て、授業実践し、事前に設定された生徒の目標に到達する学習の様子を報告した。

これからも、本研究により構築された「熊大式マネジメントシステム」の改善に取り組み、よりよい教育課程の実現、「主体的・対話的で深い学び」の実現につなげていきたい。

## 6. おわりに

最後に、本校高等部の研究を見守ってきた立場から、本実践研究の意義を述べたい。

まず、「熊大式マネジメントシステム」に不可欠なツールとして提案されているL・M・Sの3つのシートの有効性である。本実践研究では、よりよい教育課程・カリキュラムを実現するための必要な要素として、①1単位時間の授業改善 ②学習指導要領に示された内容に対応した学習題材（単元）の構成 ③1年というサイクルで学校行事や教科等の単元配列を視野に入れた教育課程・カリキュラムの改善 という3要素に焦点化し、PDCAサイクルを効率化することを意図した。また、上記①～③の各段階に、L・M・Sの3つのシートを対応させ、学習指導要領に示された目標や評価の観点が把握できる

ようにした。学校における「働き方改革」が求められる中、効率的な授業改善・カリキュラム・マネジメントの方法として、本提案に注目でき、研究発表会時の反響も大きかった。

つぎに、新学習指導要領がめざすカリキュラム・マネジメントの確立には、学校における教育活動に係る全職員がそれぞれの視点を生かし、創意工夫しながら、マネジメントの担い手としてかかわっていくことが望まれる。本校高等部の規模・職員数は決して大きくないものの、一人一人が個性と高い能力を有する本校高等部職員は、チームとして授業内容や生徒の状況などを共有し、切磋琢磨しながら授業改善・カリキュラム・マネジメントに取り組んできた。カリキュラム・マネジメントが効力を発揮するためには、こうした学校・組織を構成する一人一人の職員が、やりがいをもって、授業改善や教科間の連携・協力、カリキュラム改善などの教育活動に取り組むことができる文化的土壌が必要不可欠である。

そして、このようなカリキュラム・マネジメントの成果として、教科等（本稿では家庭科）の授業改善・題材構成の工夫や指導の工夫がいかに行われていくのが示された。授業実践の中で、タブレット端末（Keynote）を活用した「振り返り」の際、表現や「言語化」を促す効果が記されており興味深い。ICT教育の充実により、どのように「主体的・対話的で深い学び」が育まれ、よりよい教育課程の実現につながるのか、今後の取り組みに期待したい。

## 参考文献

- 1) 文部科学省（2017）『特別支援学校小学部・中学部学習指導要領（平成29年4月告示）』
- 2) 文部科学省（2019）『特別支援学校高等部学習指導要領（平成31年2月告示）』
- 3) 熊本大学教育学部附属特別支援学校（2020）『令和元年度 研究紀要』第33集, p.19
- 4) 上園宗徳・倉田沙耶香・古里王明・辻清美・八幡彩子（2020）知的障害教育における高等部家庭科の効果的な授業づくり～主体的・対話的で深い学びに向けた授業実践～、『熊本大学教育実践研究』第37号, pp.151-163
- 5) 参考文献4)の上園・辻による高等部1年の実践